



## 皮切り

この記事が読者諸兄のお手元に届く頃には、WHOつくば会議（国際経穴部位標準化公式会議）が佳境を迎えていることであろう。つくば会議を迎えるにあたって、これまでの経緯をもう一度振り返ってみたい。

WHOが経穴の国際標準化を目指し、「WHO経絡・経穴国際標準化会議」を日本で開催したのが1981年5月であるが、日本ではすでに1965年4月には日本経穴委員会（The Japan Meridian and Point Committee）が設立されており、その年の10月に開催された第1回国際鍼灸世界学会（1st International Congress of Acupuncture & Moxibustion）の一環として第1回国際経絡経穴委員会（1st International Meridian and Point Committee Meeting）も行われていた。

40年前に日本主導で始められた経穴標準化の運動が一つの形を持つようとしているのである。

## 第一次日本経穴委員会の時代

1973年7月には、（第一次）日本経穴委員会が再結成され、1974年9月には、日本主導で国際鍼灸世界学会から経絡経穴国際協定委員会（International Committee on Standardization of Meridian and Points）を独立開催している。

この活動の流れに加わったのがWHOであり、中国であった。これによって検討内容が具体化され、一挙に現実味を帯びたが、当初の日本側の思惑からのズレも生じたであろう。

## 中国との話し合いの中で

その後の一連の会議では、経絡・経穴名の問題だけでなく多くの重要な合意がなされている。

例えば、1981年5月第一次日中会議では、①十四経の経穴数は361穴とする、②経穴部位は体表解剖学的に定める、などが、1984～86年に3回行われたWHOワーキング会議では、③経絡については英語名・略号・ピンイン・漢字の順とする、④漢字は経絡・経穴ともに正字（略字は中・日・韓の順）を使用、⑤『靈枢』骨度篇の36部位のうち前腕の12寸を含む6部位が合意、などである。

さらには、1989年10月にジュネーブで開催された鍼用語標準化国際会議（WHO Scientific Group of Standardization of Acupuncture Nomenclature）では、①部位の記載が明らかな最も古い文献を採用する、②部位の表現は現代の解剖学に基づいて表記する、③解剖学的な基準点を設けて古典記載の分寸に従って分数で割り込む、なども決議されている。

WHOの会議としては、これらの合意事項を

前提として進めていかなければならず、こうして眺めてみると、今回の経穴部位の検討では、意外なほど選択肢が少なかったことがご理解いただけると思う。

## 北京会議前夜

2003年2月ごろにWFAS (世界鍼灸学会連合会) 終身名誉会長の王雪苔先生から日本サイドに向けて経穴部位国際標準化会議への参加の呼びかけがあり、その年の10月にはWPRO (WHO西太平洋事務局) の所在地であるマニラで第1回国際経穴部位標準化非公式会議が行われた。

このときの日本側は、黒須幸男先生・矢野忠先生がアドバイザーとして、津谷喜一郎先生がオブザーバーとして参加されただけで、第二次日本経穴委員会作業部会のメンバーは一人も出席していなかった (当委員会は北京会議の後で発足)。

2004年3月1日、通常通りの治療を続けていた筆者に1本の電話がかかってきた。電話の主は当時全日本鍼灸学会の副会長をされていた矢野忠先生であった。内容は、第2回会議に参加して欲しいとのことであった。推薦者は日本内経医学会会長の宮川浩也先生であるという。

事前のメールで概要を伺っていたので、軽い気持ちで承諾はしたものの、3月17・18日に北京へ行ってくれと言われたときには、いささか慌てた。パスポートが期限切れだったのである。

予約患者の振り分けやパスポートの申請手続きを済ませ、やっとのことで、14日の日本鍼灸会館での打ち合わせ会議に出席した。そこで初めて北京会議の参加者を紹介されたが、メンバーが形井秀一先生・篠原昭二先生・小林健二先生で、皆気心の知れた知り合いばかりだったので内心ホッとした。マニラ会議の報告を伺い、会議の方針などを検討して打ち合わせそのもの

は終了したが、重大な問題が残っていた。英語と中国語の両方の通訳ができる人がいなかったのである。そこで急遽、私の妻 (浦山きか) を招聘することとなり、なんとか無事出発することができた。北京会議の様子は、浦山きか「第二回経穴部位国際標準化諮問会議レポート」(『鍼灸OSAKA』誌通巻74号) に詳しい。

また、北京会議以後は、2004年4月に第二次日本経穴委員会が発足し、第3回から6回までの非公式会議が行われた。その経緯は、本誌の報告、あるいはこのほど開設となった第二次日本経穴委員会HP (<http://point.umin.jp/>) で詳細を知ることができるので省略したい。

## つくば会議へ

いよいよ、10月31日から11月2日まで、茨城県つくば市において国際経穴部位標準化公式会議 (Meeting on the Development of Standard Acupuncture Point Locations) が行われる。日本側のアドバイザーは形井秀一委員長、篠原昭二副委員長、坂口俊二委員および筆者である。小林健二委員、香取俊光委員、河原保裕委員、および北京会議以来ずっと中国語の通訳を担当してくれた明治鍼灸大学の斉藤宗則先生もオブザーバーとしての参加となる。

9月末現在、第二次日本経穴委員会は最後の英文化作業のチェックも一通り終えて、中国・韓国とのメールでの微調整の段階にある。しかし、10月中にはさらに2回の委員会を予定している。本番での会議の状況は全く予想がつかないので、できるだけ委員間の情報交換を密にして、ホスト国として万全の体制で臨みたいと思っている。

(〒980-0014 仙台市青葉区本町19-20-2F

はり・きゅう移山堂)